

同志社のヴィジョン



本部庶務部長	司 会	高 校 校 長	校 友 会 長	同 窓 会 長	理 事 長	總 長
大 江 直 吉	高 橋	山 口	武 間	秦 孝 治	住 谷 悦 治	
		泰 弘	富 貴			
		勘				

五 つ の 憲 章

大江 きょうは、新しく理事になっていただきました方々をお迎えいたしまして、同志社教育のヴィジョンという問題について座談会を開かしていただきたいと思います。

まず最初に同志社教育の問題についてお話を願いたいと思うわけですが、ご存じのように同志社はキリスト教主義教育に徹してやっているわけでありまして、具体的には、各学校で、チャペル・アワーであるとか、あるいは礼拝であるとか、聖書の研究会であるとか

をやって、キリスト教主義による同志社教育の普及徹底に努力しているわけでありまして、各学校には宗教部があつて宗教活動をやり、また宗教教育をやっている。さらに宗教主事とか宗教担当の先生がいらっしゃいまして、同志社精神の実現を中心に教育が行なわれているわけでありまして、そういったことについて十分に徹底しておるかどうか、また同志社教育についてのご批判もいろいろあると思います。そういう点につきまして、いろいろご意見をお聞かせねがったら幸いですと思っております。

住谷 僭越ですが、同志社教育の一般的な問題で、やはり総長という関係でふだんの考えを述べないわけにはいかないんですが、最初にごく要点だけ申し上げます。

同志社教育と「同志社」という字をつけているかぎりには、一つの教育、学問の特殊性だと思ふんです。そして教育における普遍性はあくまでふまえて、その上にわれわれは特殊性をつかまなければいかぬ、そういうふうにご考えているわけです。これは一般の学問の方向であるし、だれでも考えていることでありますが、そのことを私はいつも考えているわ



住 谷 悦 治 氏

けです。

普遍性と特殊性ということではありますが、これは教室でもたびたび言っているんですがたとえば芸術なんかはいちばんわかりやすいわけですが、美における日本の特殊性としてたとえば法隆寺がある。法隆寺を見れば、柱がエンタシスになっている。あるいは松によつてつくられている柱であります。ギリシャは代理石であります。それはギリシャの特殊性であります、ほんとうに日本の法隆寺の美を理解することが出来る人ならば、ギリシャの美を理解することが出来る。あるいはブルーノ・タウトのようにヨーロッパの美をことごとくまで理解できる人は、日本の桂離宮の建物、あるいは伊勢神宮とか日光の東照宮、あるいは法隆寺や唐招提寺の美を理解すること

とができる。これがやはり普遍性と特殊性のとらえ方だと思います。

その意味において、学問でも、一般の大学は、真理の探究ということばでいわれております。そしてこの学校でも、一般的には、知・徳・体といっている。同志社では三つの三角がマークで、だれがいったか知りませんが、それは知・徳・体をあらわすといっております。知・徳・体にちがいないのでしょうか。これは同志社だけの問題でなくて、一般的に知徳・体が教育の根本だといわれております。知・徳・体は一般的ですけれども、そのなかにわれわれが考えるのは、やはり同志社的なものであります。それはキリスト教主義ですね。それは新島先生が自由教育、自由教会両者併存、国家万歳といっているように、新島先生の方針というものが同志社の教育の根幹になっていると思うんです。私は総長就任のときに、僭越ですが、憲章というようなことをいってそれを五つにまとめたわけですが、一つはキリスト教主義、これは新島先生がいわれたことでありますが、キリスト教主義は当然であります。それは聖書によって示されております。それから第二は、新島先生ご自

身のキリスト教に立った良心的なもの、あるいはヒューマニズム、あるいは自由教育、良心を手腕に運用するというようなこと、それは新島先生の教育の主義でありましょう。

私は、知・徳・体という同志社のマークにもう一つ結びつけたいののは、ただ知・徳・体というような抽象的なものではなしに、創立者の新島先生、デヴィス先生、ラーネッド先生という、現実キリスト教によって生きた人々の精神が同志社のはじめにはあらわれている。それは新島先生の一生涯を通じて、死を決して外国へ行って、帰ってきて、キリスト教反対の場所に、しかも御所のうしろに同志社をつくったという、いっさいの反対を抑し切ったひじょうな勇氣であります。またデヴィス先生は、情熱の権化といわれ、同志社の騒動がたびたびあるときに、デヴィス先生は折っては泣き、泣いては折って、朝、目をさますと、枕はびしょぬれになっていたというくらい情熱のクリスチャンであります。それからラーネッド先生は、理性の権化といわれるような先生で、狂瀾怒濤のときにはちょっと姿が隠れているけれども、平静になれば、厳然としてその姿があらわれてくるとい



高橋 勤氏

うことで、そういう形で、勇気と情熱と理性というものを同志社精神として、同志社のマークにダブらせていいのじゃないか。

第三は新島先生の平民主義でありまして、これは新島先生自身が、自分は天下の平民新島襲ということをしている。これは具体的には五平さんにたいしてまったく平等の人間として尊重したということは大事なことであります。五平さん主義はいまでも生きているといわれているくらいで、これは平民主義、あるいは人権尊重というものがそこに出ていると思います。足利武千代さんなんか小学生のときに、御所のところを京極校に行く途中、新島先生が寺町から通っていく。それで御所の間で会って、これがえらい新島先生だということを知り、帽子をとってお辞儀を

する。新島先生はほんとにいいねいに、帽子をとって子供にお辞儀をしてくれた。足利さんとすればそれがうれしくて、毎朝御所のところで会う時間に待っていて、新島先生にお辞儀をしていたということでもあります。そういうことで足利さんは同志社に入る。相国寺最大の檀家の息子がヤソ教の同志社に入るというので、大騒ぎを起こした。それを断固として同志社に入った。

第四は、いうまでもなく大学は真理の探究の場所であります。現に真理の探究の場ということが問題になっておりますが、真理の探究ということが同志社教育の本質に結びついているときに、これを阻害するというようなものは、同志社にいる資格がない人だと思えます。同志社はやはり真理の探究という一般性に足をふまえているということで、これは同志社だけのことでないと思います。

それから第五は、同志社におけるインタナショナルイズムで、創立のはじめから同志社はインタナショナルイズムなんです。ラーネッドさんやデヴィスさん、のちにもえらい人がたくさんおりますが、デントン先生やグウィン先生など。デントン先生とグウィン先生はま

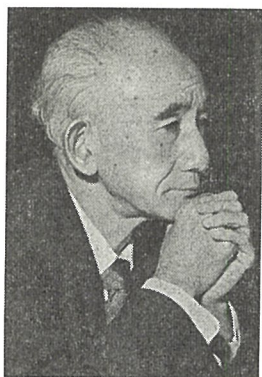
ったく対照的であります。デントン先生には一つの激しさがあり、グウィン先生にはひじょうに温厚なところがあるけれども、めざすところは同じだと思っております。こういうことで、同志社では、ほんとにいい意味のインタナショナルイズムというのが教育のなかに浸透している。

これが私の考えるだいたいの同志社の教育の理念であるし、そういうものが実現されるということが一つのヴィジョンになるわけだと考えております。

大江 高橋先生、そういうヴィジョンを具体的にそれぞれの教育の場に生かしていくことについて、どういうふうに考えていけばいいか、そういう問題についていかがでしょうか。

キリスト教を徳育の基本とす……

高橋 昭和三年だったと思いますが、名古屋で、全国の私立学校の教職員組合の教育研究会、全私塾の教育研究会がありました。その報告に本質的に教育に区別はありえない私学に特徴なんかあるのはおかしい、キリスト教主義教育にも特徴はないんだということ



大江直吉氏

があるのをよみまして、私はがく然としました、そのときから自分の考えをまとめていたわけなんです、私は学校というのは、教えることに始まり、学ぶことに終わると思っております。教えるということは、これは総長がよくお使いになるルイ・アラゴンのいった教えるとは希望とともに語ること、学ぶというのは、真実を胸にきざむことである。この考えを同志社の学校にうつしますと、学校として重要な点が三つあります。お互いの創意を尊重する寛容、疑うことができる自由な精神、無知と不正に勇敢にたたかう理性です。そういうものが土台になって、われわれの文化文明という遺産を継承する保守性と、それを批判的に新しい価値を創造し応用していく促進性が生れるわけですが、そういったもの

を神からのよびかけとして答えていくものと考えておるわけであります。ですから、政治経済に従属しない。それらに先取りして進むべきものだと思えます。

ところで、同志社の教育の目的は、第二条に、憲法、教育基本法によってキリスト教を徳育の基本とするとはっきり書いてあるわけですが、新島先生は単なる徳育を示してはおられない。もちろんそれも含まれているが、人間の生き方とか存在のあり方とか、エネルギーとして人間を新生していくもの、神の永遠の批判的な問いかけにたいして、積極的にかつ意図的に遂行していくものを私は徳育と解釈しておるわけなんです。それが自分だけの完結でなく、他者とともに働いていく。そのなかで集団としての同志社というほんとうの徳育が発展するという考えであります。

こういうことを高校生に言うとうむずかしいものですから、高校生には、人間尊重、生命の畏敬、もっとわかりやすく言いますと、人間を手段化しないこと、物体として取り扱わないこと、差別しないこと、そういう点からエリート教育には反対するわけですが、頭がよい悪いで判断してはならない、すべての人

が能力を全面的に発展させ、個性を豊かにしうる学校、それが同志社教育の特殊性だと思えます。

これを阻むものにはたいしては抵抗していかなければなりません、その第一に、私はやはり罪ということを思うわけであります。これはほかの学校とちがうところだろうと思う。人間を手段化したい考え方は、やはり人間の矛盾、弱点ともいうべきもので私はこれを罪と思うわけですが、それは神の否定であり、あるいは神の座につくということになると思えます。この罪を教えるということが同志社教育の大切な点だと思えます。無気力、無批判、無感動を今の高校生は三無主義といっています、これに反撥する高校生、あるいは造反の高校生にきいてみると、やがて自分たちがそういう体制のなかへ入ってしまう弱さ、あせりというものをもっている。そこでわれわれはやはり弱さというものを教えないければならないと思えます。公立やほかの私学の、教育の目的というものは、ヒューマニズムとか科学主義、イデオロギー、道徳という域を出ないと思いますが、同志社はこれと激しく緊張対決しながら、罪を教えることが大

切なことだと思ひます。

もう一つの同志社教育を阻むものは権力でありまして、これは公立と私立のちがいだと思ひます。公立はどういう政体になつても、教育のなかに権力が入つてくると思つております。神の権威以外は人間を手段化するものでありまして、人間は尊重され、手段化されない、生命は畏敬さるべきものであるということをも阻むものに、権力があると思ふわけです。権力というものは、上の権力にたいしてたたかひを放棄しますと、下への権力を丸出しにする人間の弱さということで、罪というものに直結されるわけなんです。同志社教育というものは、あくまで人間の弱さ、罪、それから権力を入れないところで、他とはつきりした教育のヴィジョンを打ち出していいんじゃないかと思ふんです。抽象的なことになりましたけれども。

一貫教育——小学校の必要性

大江 同志社教育のなかでとくに女子の教育については、いまだからひじょうにユニークな教育をしてきたと思ふんですが、武間理事から、同志社のなかの女子教育について

あるいはヴィジョンを話していただいたら結構かと思ひます。

武間 女子部では、キリスト教教育に力を入れておられるようですし、幼稚園では、毎朝、小さい子供さん達が、手を合せて、神に祈りを捧げ、感謝をすることを覚え、神を信じることを小さい心の奥底に植えておられます。

ところが、幼稚園を出て六年間、同志社小学校がありませんので、その小学校へ行きますから、同志社のいわゆるキリスト教の一貫教育ができません。もしも同志社に小学校があれば、中学・高校・大学へ行くようになつても、幼稚園で心のなかに植えつけられた種は、りっぱに芽生え、生長するのではないかと思ひます。

ただいま大江先生のお話のように、たしかに女子部では、これまではユニークであるといわれていた教育がなされてきたと思ひますが、激動している現在では、封建的な社会秩序に対して各方面で若い力が、それを打ち破ろうとするエネルギーとして頭を出して来たのですから、いつまでも古い考えや制度で教育をして行くことはできなくなった時代であ

ります。若い人々の力によって今の教育の方針や基本などが改革されようとしていますので、この改革が正しくなされることを願っています。新しい酒には、新しい皮袋が必要であるように、新しい時代の若い人達のためには、改められた教育制度や教育内容が必要なのでありますが、さて、その新しい皮袋とはどのようなものですか、むずかしい皮袋作りだと思ひます。

それから、いつも思うことなんですが、限られた今出川女子部校地に、女子中・高・女子大学とありますから、押しくらまんじゅう的に存在していて、お互いに自分の属している学校への愛情からか、あるいは、独立採算制のためか、どうも利己主義的になって、せまいところで陣取りしてガヤガヤっているのは、どうかと思ひます。

大江 陣取り競争の話が出ましたが、これは次にふれていただくことにして、いま武間理事から一貫教育の話が出まして、小学校がないからぐあいが悪いというお話もありました。小学校の問題はずっと前からありましてわれわれも考える必要があるんじゃないかと思つておりますが、理事長、そのへんのご意

見はいかがでしょうか。

秦 小学校の問題はひじょうに古い問題でなかでも、幼稚園から、あるいはまた幼稚園の父母のほうから相当強い要望がございました。歴史的に見ますと、創立六〇周年の記念事業のときに、ちょうど湯浅八郎先生が総長で、奥村竜三氏が委員長だったんですが、そのときの記録を見ますと、たくさん目的事項のなかに、小学校をこしらえる、それから一大体育館をこしらえる、それから一大浴場をつくるというようなことまで書いてありますね。

大江 あの時分には、お風呂場の必要があったとみえますね。

秦 小学校は、経営の面ではじゅうぶん成り立つというのが、今日まで私の承知してい



秦 孝治郎氏

る知恵なんです。ただ、今日のように京都といえども相当地価が上がってまいりましたので、今後これをどういうふうにもっていくかということとは、やはり理事会が今後検討すべきで、短大の問題とか、あるいはまた通信教育の問題とか、加えてこの小学校の問題は、一つの研究の対象にはしないかと思えます。もちろん、現在起こっている紛争を正常状態にして、よりよい教育、しかもキリスト教主義によるよりよい教育をやるためにはどうあるべきかという学園のいろんな改革については、さらにまた研究を要すると思いますけれども、いまおっしゃった小学校の教育については、もう一ぺん掘り下げて研究する必要があると思います。

同時に、いま皆さんからおっしゃいましたように、官学というか、あるいは国立、公立という教育機関にたいしまして、私学としての使命、私学としての意義あるいは特徴というものはどこにあるか、そのためには、幸い同志社はほかにはない創立者をいただいております、同時にまたキリスト教主義という特殊の精神教育をもっておりますので、われわれはこの絶好の歴史と伝統の上に立って、今日の

実際のあり方にたいして、われわれ自身なんとかこれをもう少しよりよいものにしていかなければならぬというふうに考えるわけでございます。

大江 それでは山口理事からこの問題についてご意見を伺いたいのですが、最近山口理事は学外から財務の担当理事になっていただきましたまして、同志社のことについてご研究をいただいておりますが、学外からごらんになったご意見とか、同志社教育の理想といったことについて、お聞かせいただいたら結構かと思えます。

経済面の改革を……

山口 私は、教育のヴィジョンというような大それたことは申せませんが、一般社会人として素人なりに考えておりますことは、学校は、さきに高橋先生のおっしゃった教える、学ぶということだけでなく、それ以外に、人間形成の場としてのひじょうな重要性があるんじゃないかと考えているわけです。

そういう意味で最近の学校の状況を見ておりますと、いわゆる新島先生のキリスト教主

義による精神教育という面が、なんとなしに薄れていくような気がしてならないんですがこれはわれわれとしてはどうしても守っていかねければならないんじゃないかということ強く感じているわけです。それを守っていくには、もちろん先生方が最も中心ではありませんけれども、やはり経営面からそれを守っていくようなやり方をしなければいけないんじゃないか。たとえば具体的にいうと、授業料の値上げについても、このあいだ、高校の授業料を値上げすることによって、だんだん生徒の質が落ちるというようなことも伺いましたが、そういった面において、授業料値上げも大きな影響があるし、最近助成の問題がやかましく要望されておりますけれども、これもおのずから限度があつて、あまり行きすぎると、私学の特殊性というものがなくなる。そういった点をいろいろ考え合わせて、学園の経営にタッチする理事としては考えなければならぬんじゃないか、そういう立場で同志社のいわゆるキリスト教主義による精神教育をしっかり守りつづけていくべきじゃないかということを考えております。

それから一貫教育ということについては、

私は素人なんですが、同志社としてはぜひそうしなければならぬと思います。それには小学校が欠けているという問題もありますけれども、やはり同志社全体としての教学面、それから経営面、両面からの総合制ということがいちばんだいじじゃないか、それは一貫教育を守りつづけていく重要な環境じゃないかと思います。

それからもう一つ学園の改革という問題は現在の時点に立ってひじょうに重大な問題だと思います。こんどの学生の騒動についても、教学面の改革をやかましくいつておるわけですが、学校としては教学面だけでなしに、経営面についても思い切った改革をこの際やる。学園の改革を教授会だけにまかすのじゃなくて、経営面に理事会が取り組んで、教学面と並行して経営面の改革をやるべきじゃないかと強く感じております。

ゼネレーション・ギャップの克服

住谷 同志社教育というものは、一般的なものの上に、同志社の特殊性において一つの特徴をもっている。理事長が言ったように、伝統と歴史をもってさらに前進するという態

度を、われわれはやはりもつべきだと思ふんです。

いまの学園の改革についてですが、これは問題がいろいろ複雑ですから、一口にいえないと思いますけれども、やはり創立者の精神による平民主義というか、民主化されたことにおいて、教職員全体、学生とももちろん一体であります。同志社の普遍的な教育理念に特殊な教育理念をふまえて、全同志社ができるだけ統一した方向をとっていく。そこにおいていま見られる、各人、先輩と後輩、教師と学生との断絶、これはいまの学園問題の中心だと思ひますが、いわゆる世代的な断絶をどのように克服するか、このゼネレーション・ギャップの克服が根本問題であると思ひます。

それについて最近ミードという人類学者がいつていることですが、ゼネレーション・ギャップをどのように克服するかといえば、たった一つの道しかない。それは教師が学生のなかへ入りこんで、あるいは相手の生活のなかへ入りこんで、相手の人がどういふふうにかへ入るかという文脈を通して、相手の生活を体験して、そこにはんとうの意味における対

話を実現するほかはない、それ以外に道はない、そういうことをミードという人は言っているわけですが、それはシュヴァイツァーが黒人のなかに入って、黒人の考え方、あるいはその文脈といえますか、発想法といえますか、そういうものを身につけて、そして八十余りの生涯を費して、森林の王者とか、黒人の救済者とか、生けるクリストとかいわれた。そういう形においてシュヴァイツァーはほんとうに黒人のなかに入って体験して、生活を身につけたわけであります。それはミードのいわゆるゼネレーション・ギャップを克服するのに、身をもってなかに入ったということだと思います。

そのような意味において、対話ということを持ただことばの上でなしに、相手の生活の匂いまでも身につけるといことで、断絶のゼネレーション・ギャップを埋めるようにするそれがいま民主化されるために重要だと考えます。

武間 私は理想の学園とか学生像とかいうことの前に、理想の先生像がほしいと思うんです。りっぱな先生もたくさんいらっしゃると思いますが、なかには先生にたいしての不

信というのが相当あります。あるいは教育内容の貧弱さとか人間性の欠如、あるいは精神教育の足りないこと、進歩のない講義とか、また先生方の間の軋轢や利己主義的な行動があったりというようなことも相当影響しているんじゃないかと思うんです。

これには先生方の定年制というものが災いしていないでしょうか。とにかく同志社へ足を突っこんだら、怠けていようが一生懸命きばろうが、六十五歳までは在職できるんですから、これは相当考えなければならぬ制度じゃないかと思います。若い先生方が芽を出して伸びようとしても、伸びることもできず下積のままであったり、途中で外へ出なくてはならないようにされたりすることもありますので、やはり先生方の間の融和が足りないせいでしょうね。そういうことが学生、生徒にみな影響をおよぼしていることが多いので、先生方の理想像のほうが先きで、私は大事じゃないかと思えます。そうしたら自然に学生、生徒によい影響がおよんでいくのは当然のことです。そして同志社がいわゆる真理探究の場であって、人格と人格とのふれ合い、また信仰の道場であってこそ、ほんとう

の理想の学園であるのではないでしょうか。

同志社の教育環境

大江 同志社教育の問題については、まだいろいろありましたが、次に同志社の教育環境の問題についてお話を伺いたいと思います。

ご存じだと思うんですが、だいたい今出川と新町の両方のキャンパスで三万六、七千坪ありまして、そこに同志社のほとんど八五―六パーセントの学生が入っておるということで、主として勉強の場が今出川と新町になっており、キャンパスがひじょうに狭あい化している。生徒数も毎年若干ふえますし、教職員もみないっしょに仕事しておるわけなんです。ありまして、こういう問題について、今出川キャンパスでこれ以上学生数がふえていいのかどうか、あるいはまた武間理事からお話がありましたように、狭い所で教育をするより、広い所でのびのびと、やたらどうかというご意見も出ております。中学、女子高校、女子大で「新しい天地」を開拓するといふようなことはどうですか、ひとつ放言していただいたら結構だと思います。



武間 富貴氏

武間 私は女子大学なり女子中・高なりが田辺へいって、それこそ、私のところは、田辺校地全部をもらいます、というぐらいの意気込みがあってもよいと思うんですけれどもね。

しかし、それについては、教育の施設とか、学生・生徒の寄宿舎、教職員の住宅などを考えなければなりませんけれど、私はそれくらい在意気、元気があってもよいと思います。

中学移転の問題——中学が岩倉高校の敷地内に行くのではなく、単独で近くの土地に移るはなしがでた時は、岩倉高校がもっと大きな気持で、隣人として迎えるくらいの気持ちでだされるのが、同志社人ではなかったかと残念に思いました。みんな、ほんとうに大きな気持ちをもってほしいです。

山口 私は理事は四期めですけれども、現在の教育環境をみて、これではどうもならんじゃないかという感じをひじょうにもっているわけです。それ以来、いわゆる学園都市問題なんかも、自分でいろいろ構想を考えたり人の意見を問うたりしてきたわけです。ようやく田辺に、土地は少し小さすぎますけれども、自分の多少考えておったことが実現して私もひじょうに喜んでいてるわけです。ところが、その後の事業計画が進まないことは、残念に思うんです。あれだけよい土地を手に入れたんだから、あれを推進すべきじゃないかということの基本に思っております。

学生・生徒数の問題、これは教学との関係のある問題で、生徒数はどれくらいがよいかということとは、一つの研究のテーマだと思いますが、私はこういうふうに思います。従来の行き方を見ておりますと、経営のために学生数をきめているくらいがある。学生数というのは、教学面からこれだけの人数がよいだろうとか、これだけ減したら問題があるだろうとか、教学面から学生数がきめられて、その経営面の努力をするということが理事会の仕事だと思えます。

高橋 キャンパスのことについて武間さんから話が出ましたけれども、私は、どこがどう移ったらよいというようなことはまだわかりませんので、言えませんが、基本的な気持だけ申し上げたいと思うわけです。

私はやはり教員の立場ですから、理屈めくかもしれないけれども、必要というものをどうあらわすかという点、これは大学も中高もいっしょですが、教育課程と教育行政という分け方をするわけです。教育課程というのは、教科書問題とカリキュラム、いま大学でも騒いでおりますが、このカリキュラムを生かすために教育行政というものが行なわれて、その教育行政のなかに、教職員の地位と、それから施設環境と、財政手段というものを考える。そういう分類をして考えているわけです。理念というものは、二十年たっても三十年たっても、変わってしまっている困るのでそういう立場に立って考えますと、キャンパスの問題でも、学生、生徒の問題にしても、基本的に現在ある最もよいものは、少しも侵すことなくますます伸ばし、悪いところを早く見出していくというのが私の基本的態度です。

高校はたしかに広くて、キャンパスはりっぱでございます。同志社中学はひじょうに困っておる。それはわかっております。しかし岩倉に来ることによって、中学も高校もだめになったらいけないのでありまして、それを侵すことなく、そういう理想で立っていく。同志社大学もそうだと思います。おまえのところはあいているが、おれのところは困っているというのじゃなしに、いいところはこれを侵すことなく伸ばし、悪いところは直していく、これが根本になると私は思います。それからもう一つは、同志社中学は、ほんとうに自分の学校はかくあるべきだということをよくお考えになっているのでかんとんに岩倉へと動いていらっしやらないと思うんです。私は同志社高校においてになる論理は出てこないと思っています。各校の独自性を十分比較検討して、そういうあり方で解決していかないと、教育の基本線というものが、どこに行っても外的条件でだめになります。ですから、私はよく言うのです。理事長の大きな仕事の一つは、理想のキャンパスと場所をもった高校が一つ同志社につくられたということで、同志社にとって大きな意味のある大切な

ことであると思って、これをわれわれは死守するとか、坐りこんで守るとか、そういうものではない、当然のことです。

山口 高橋先生のおっしゃる、いいものは残して悪いものは改めていく、これは当然のことなんで、そうしなければならんと思いますけれども、そういうことをお考えになるもう一つ根底に、同志社総合学園としての総合性という観念があって、その上に立ってのお考えでなければいかんと思うんですね。

高橋 そのとおりです。だから私が同志社教育の必要性ということをし上げたのは、そのつもりで申し上げたんです。それからもう一つ教職員について申し上げますと、私はそういう目的を具体的に達成するのは教職員であると思うんです。それで教職員の地位について、皆さんから笑われるかもしれませんがけれども、突拍子もないことを思っているんです。ユネスコの教員の地位にはこう書いてある。第一に教職員の仕事は重要で、期待されること大である。深い教養と専門性を要求されるため、給与は高い。第二に教師は直接学生生徒に責任を負っている意味で職務上差異はない。上下関係、官僚関係を機構にも

ちこむことはまちがいで、これが一般行政とちがうところだ。三番めは、以上によって、給与改善は当然全教職員一般という意味で考えるべきだ。そういうことが書いてあるわけなんです。戦後組合のできましたのは、旧制同志社中学がはじめですが、組合の連合の規約をつくったときに、私の主張は、同志社の幼中大の基本給はみないしよで、研究費とかいうもので差がつくだけ、こういうことを第一に考えないで、岩倉の土地が広いから中学と合併せよというような(笑)：教職員の地位の向上ということをはんとに考えないといけないだろう、ここにヴィジョンが一つある。

秦 じっさい、同志社の校地あるいは校舎というものが過去十年あるいは十二年前からどのくらいふえているかということ調べますと、他の学校よりも長足にふえているんですね。それにもかかわらず狭隘なんです、一九六七年に「同志社の現状と展望」という題で私が研修会で話したところを数字だけ読んでみますと、校地は相当大きく増加しておいて、一九五七年、すなわち昭和三十三年には一〇万〇一六八坪、一九六六年度、すなわ



山口泰弘氏

ち昭和四十一年度には五万四二七坪、指数は五五三、つまり十年間に四万四一〇九坪ふえて、四五三パーセントのふえ方をしておる。それから校舎については、一九五七年度には延べ坪が二万五七九〇坪であったのが一九六六年度では五万五九五三坪、指数では二一七、つまり二倍にふえておる。それでさきほど田辺の問題もありましたが、田辺の問題は、これだけふえておるにもかかわらず、大学あるいは中高の設置基準から見まして、今出川キャンパスでは、近畿圏整備法の問題もありますし、とうていいいけないということで、理事会としては、ぜひこれは拡大しなければいかんだろうということです。

そこで、こんど私の考えますのは、やはり同志社というものを主において、キャンパス

の問題、それから学生生徒数の問題、教職員の問題というものを考えますと、学生生徒数は、ご承知のとおり小学校は、戦前は二〇パーセントが中学へ行ったというごくプアーな状態だったんですが、現在では七五パーセントが中学に行く。あるいは東京なんかでは、九〇パーセントまでが小学校から中学校に進学する。中学から高等学校には七五パーセントほどいくということになっておりまして、つまり人口増加と進学率というものがひじょうにふえておる。

そうしますと、同志社では、四十三年度末では二万九五〇九人と大学から幼稚園までのトータルになっておるわけですから、これのふえ方としては、そう大きくなっていないんです。昭和三十四年では二万一〇八八、それが二万九五〇九ですから、学生数はそれほど大きな増加を示していないにもかかわらず、校地、校舎というものが相当ふえておる。その後三年間に田辺とかあるいは岐阜の土地がふえますと、現在ではだいたい一〇〇万坪になっっていると思うんです。したがって、校地、校舎をどう利用していくか、それがためには進学率がふえて、同志社の学生生徒を

受け入れる態勢をどういうふうにもっていくたらいいか、という問題になってくようと思えます。

山口 現在の時点では、いまおっしゃったように、今後どういう方向へもっていくかという問題を考えなければならんと思います。とにかく現実には増加した状態で、これは近々にやらなきゃならんことだと思っんです。いまの時点で言うと、私達の当然責任の一つなんだけれども、事につきあたってからどうしようかと考えるのは、経営者の立場に立つと、いちばんまずいことなんです。将来どうあるべきかということを見通して、いろんな対策を立てることが、経営者としていちばん大事なことで、私も理事として責任を大いに痛感しますね。田辺問題だけでなく、あらゆる面に受け身であって、前向きにもの考えるということがない。

秦 田辺の問題は今後全学園を通じて長期の計画を立てて、言うならば、今日の時点におきましては、この数字から見しても、教育環境はわりあい伸びてきたと思います。だから、いれもののできたから、今後はなかのアンコをどういうふうにくまなく充てんする

か、それがために、いま今出川からあそこへ移転するという問題は、相当いろいろ問題があるから、むしろ田辺の新しい天地をどう生かしていくかという課題をここで考えていかなきゃならないと思いますね。

住谷　そうですね。教育は悪い環境ではできないです。やはりいい環境でなければ、十分な教育はできないと思いますね。

同志社の「経営」

大江　それでは、引き続き同志社の経営問題、財政問題についてお話をねがいたいんですが、これはさきほどから出ておりますように独立採算制といえますか、そういう点で問題点が提起されておりますし、また授業料も、中学校、高等学校は来年度は値上げしなくちゃならないという問題も出ておりますし、また国庫助成という問題もありますので、ひとつ理事長のほうからいろいろご意見を出していただき、また財政問題についての見通しとか、あるいは教職員のベースアップの問題とも絡み合った問題もありますので、そういうことをひっくるめて問題を出していただいたら結構だと思っております。

秦　一九五七、すなわち昭和三十二年を、一〇〇として昭和四十一年までの十年間をかいっつまんで申しますと、教員の数が四〇パーセントふえている。それから学生数は、全校的に考えまして三十七パーセントふえておる。こういうふうなわけでございます。学生数は主として大学がふえておるのであって、中高は現状維持というふうに考えざるをえないと思います。

そこでこんどは教職員の給与等でございますが、昭和三十四年を一〇〇といたしまして昭和四十三年と較べてみますと、人件費におきまして約四・六倍になっております。十年間に四・六倍になるというふうな大なことです。今後こういうふうな方にマッチする収入がはたして得られるかどうかですね。

そこで、独立採算制度の問題は、一面においてはいい面と、また一方悪い面といえますか、不便な面と二つあります。時間がありますので、いい面から言いますと、各学校が小さい学校は小さい学校なりに、大きい学校は大きい学校なりに支出にたいして収入を考える。いわゆる出るを制して入るを図るといいますか、つまり収入の合う一つの計画的な

予算生活というものがいります。ところが同時に、同志社のように大学から幼稚園までの学校になりますと、一つの学校では赤字だが、一つの学校では赤字、そして総合的な採算の融通性がない、一方は見殺しにするというような点もございしますので、これがいわゆる悪い面といえますか、ひじょうに不便な点でございます。したがって、今後同志社が十年、二十年先、同志社の大きく伸びる道、また欠陥のない大きな成長をはかっていくためには、この問題をもう一ぺん元へ戻して真剣に考えてみる必要があると思います。

それから授業料でございますが、いままでは、さきほど申したような相当大きな伸び率でございますが、今後はこういう大きな伸び率は絶対に期待できないと思います。そうしますと、残る問題は、授業料につきまして、生活水準あるいは物価指数等を一つのめやすにして、合理的な増加はからなければならぬと思いますけれども、むりな伸び方はむずかしい。そうすると、国家からの直接の助成、それから地方自治体からの助成、そういう問題にもっていかなくちゃならないと思います。

大江 高橋先生、いまの財政問題とか国庫助成の問題、授業料の問題、そういった全体の問題についていかがでしょう。

高橋 授業料と国庫補助のことですが、基本的な考え方は、国庫あるいは地方自治体が私学を補助すべきであるという意見は、私学が苦しいからではない。私学に生徒がたくさん来たからではなくて、基本的には日本の教育を高めるための積極的要求である、教育は直接国民的なものであるから、当然の権利として主張するべきであるという立場に立たなければいかんと思っているわけです。

第二は、助成運動を一生懸命やるということ、学費を下げることであり、さきほど言いました教職員の地位とか環境、教育条件をよくすることに直結しておると思っております。ところが、こういうことをわれわれは怠ったのでありまして、ことに大学は怠られたと思うんです。大学は、二十五、六年ごろマスコミにされるときに助成運動をすべきだった。ところが、いまばう大になってからなされる。しかも学生が騒いでいるからやっつけらっしゃるので、教育をいちはん大切にしていられっしゃる大学の先生がいちばん怠られた。

われわれもそれを大学の先生に言わなかったという欠点もあるわけです。中高において、三十七、八年増加しはじめたときにやっただ。国家はそれをうまく利用しまして、大学を主にして中高をはたらかしにする。この辺が文部省のいちはんいけないところだろうと思います。

第三は「金はだすがもんくはいわぬ」いまという態度が大切です。教育とは信頼がその根底にあるのでうたがって対応する姿勢はいけません。

大江 住谷総長、国庫助成の問題とか授業料の問題について、ご意見をお聞かせ願いたいと思いますか……

住谷 これは常識的なことだと思いますが国立と私学とは、卒業生は私学が六〇—七〇パーセントで圧倒的に多い、そして文部省というか政府では、国立だけに補助して、私学の補助がひじょうに少ないということは、国民教育そのものにたいする根本的な考え方がかたよっていると思うんです。実際に日本の社会国家に活動しているのは、自分の費用を出して学んだ私学の人が圧倒的に多いんですよ。だから、日本国家の社会、文化の発展に、

私学はじっさい過去何十年間役に立っている。それであるのに補助が少くないというのは、私学にたいして偏ばな考えをもっている。税金を出した親は、その税金で官吏を養い、ことに官学、国立の学生をも養っているわけです。ひじょうに援助しているわけです。私学の父兄は一方でそういうことをやっておって自分の子供にまた費用を出さなければならんという二重の負担をしているわけです。

大江 武間理事は、授業料問題とか助成問題、独立採算制について何か……

武間 授業料しか収入の道のない同志社、大宮利会社以上の経費、人件費をつかっていますので、授業料はほとんど増額されていますから、もうすでに授業料の限度は越えています。もちろん、助成金も結構ですが、助成金をあてにするよりも、出費のことをもっと心ずべきだと思います。外国の大学では、総長が全国の卒業生を毎年訪問して、寄附を仰ぎ、それを経費にあてているということで、総長の努力もさることながら、卒業生達も母校への協力を惜しまないという羨ましいことをしばしば聞いておりますから、学校当局、教職員も卒業生ももっと協力、努力

することはできないのでしようかしら。

高橋 ちょっと言い落としたんですけれども、授業料が高いのはなぜ悪いかというと、質が落ちるからということをよくききますが、そうではないと思います。同志社に来たものが来れなくなるのがいちばん大切なことだと思ふんです。

山口 だから質が落ちてくるでしょう。

高橋 結果的にはそれが出るんですが「質とは何か」が問題ですね。やはり同志社は、能力があれば伸ばしてやる、個性豊かにしてやるというのが本質だと思いますから、ほんとうに来たものが授業料が高いために来れないというのに問題がある。質が悪くなるからと大学の先生はおっしゃるんですけれども、今年は昨年より授業料が高かったから、今年の生徒は質が悪いのだということになると、生徒は馬鹿にされたことになる。

大江 山口理事、経営とか独立採算制の話が出ましたけれども……

山口 独立採算制の問題は、これはさっきから諸先生のおっしゃいましたように、独算制というのは数字面だけの問題なんですけれども、それが教学面とか経営面まで及び、学

園の総合性をたいへん阻害するという傾向に現実になってきておりますが、できるだけ独算制を廃して学園の総合性を確立していきたいという考えをもっております。

それから授業料については、これはいろいろ問題もあって、低いほどいいのじゃないかと思ひますけれども、これは経営面との関連において考えなければならんことで、もうある程度限度にきていると考えております。

それから寄附の問題ですが、私学の場合、運営上寄附というものは一つの大事な要素だと思ひますが、この寄附の集め方については、いまおっしゃいましたように、よほど研究すべきじゃないかと思ひます。一つ考えるのは、事があったからといって、そのときにしゃにむに寄附を集めるという形も問題があるし、寄附というものは、もともと自発的であるのがいちばん望ましい形であるので、それではなかなか集まりませんけれども、私も校友会でこういうことを提案したんですが、平素から寄附にたいする考え方をみなに植えつけて、気持よく寄附ができるような形にもっていかなければならんんじゃないかと思ひております。

それから国庫助成については、最近私学振興会、私大連盟あたりも努力しておられますが、国庫の金というものは、高橋先生がおっしゃったように、公の支配に属さない事業には寄附してはいけないうたてまで、研究費とかなんとかはいいいとしても、人件費まで助成されるということになると、国の支配が及んできて、私学の自主性が破壊される心配もありますし、どの辺にとめるべきかということの問題だと思ひます。

ただ、財政問題については、補助金を一生懸命ふやすということ、これはもちろん一義的にやらなければならんことだけれども、それだけにたよっているのじゃなくて、いま申し上げた寄附とか、あるいは内面的な合理化とか、要するに財政の強化についての内面的な努力をうんとする必要があると思ひます。寄附とか助成金をもらうことを考えることと併行して、学校自体が合理化をはかる。そういった点についてもっと十分に検討する必要があります。あるのじゃないかと考えます。

大江 まだまだ問題はありますが、時間ですので本日は、この辺で終らせて頂きます。